
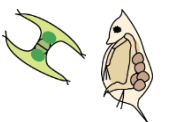


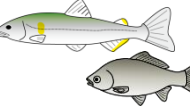
# 令和4年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性 (「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームの成果等より)

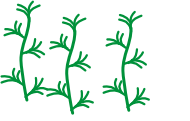
凡例： 北湖・南湖の現象 北湖の現象 南湖の現象   
 → 因果関係がある可能性が高い   
 -.-?-> 因果関係ははっきりしないが可能性が疑われる


## 資料4

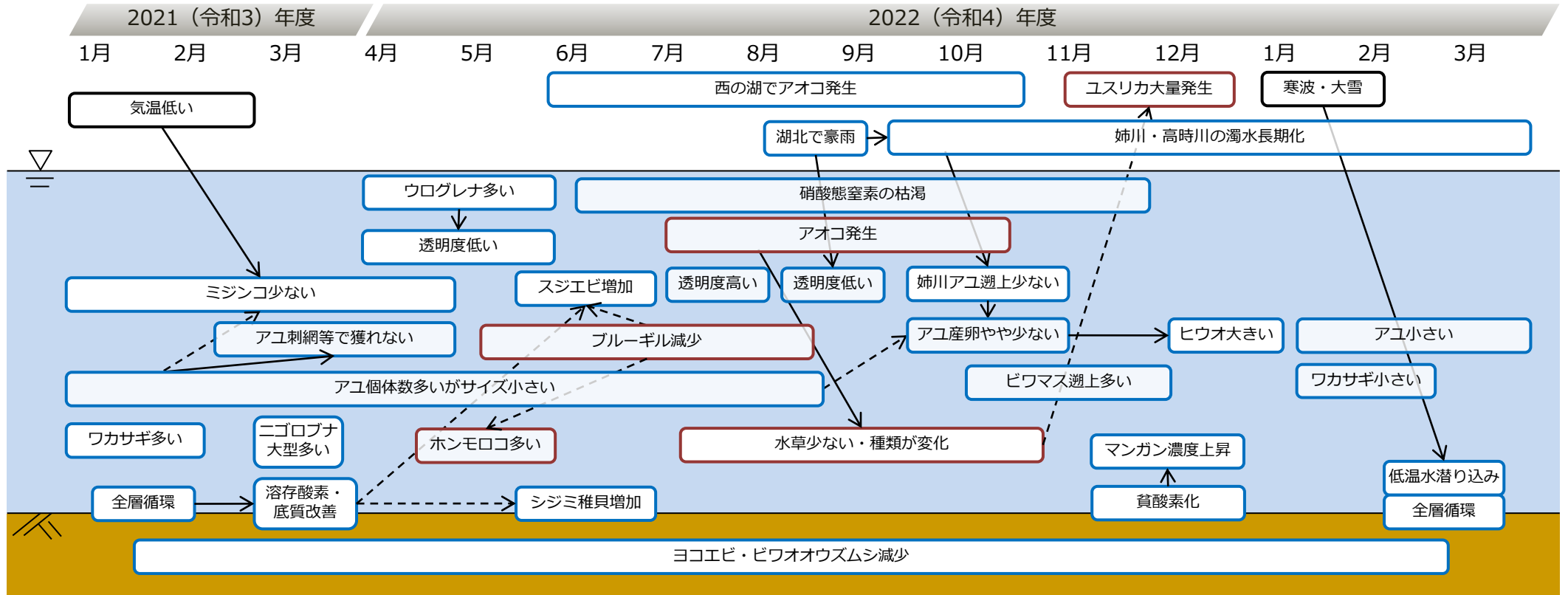
**陸域社会** 

**水質** 

**魚介類** 

**水草** 

**底質** 



※この模式図は、琵琶湖の状況について関係者の意見等を整理したものであり、各事象間の関係性について科学的に実証されたものではありません。

滋賀県では、琵琶湖の生態系のバランスを是正し、本来の在来魚介類のにぎわいを復活させるため、行政、事業者の枠をこえた「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームを結成し、琵琶湖で生じた現象の把握や課題の整理を行っています。本チームで議論した内容を踏まえ、令和4年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性を時系列に沿ってまとめました。なお、このまとめは学術的な検証を得ていない結果を含んでいることにご注意ください。

令和4年度はとりわけ南湖の環境変化が多く確認されました。ホンモロコは2019年度以降急速に資源が回復してきており、南湖湖岸でも多くの産卵が確認できるようになりました。ブルーギルも年間を通じて少ない状況が続いています。水草の量はここ20年で最も少なく、また種類も在来種のクロモやササバモ主体となったほか、南湖では近年ほとんど見られなかったイバラモが多く確認されました。一方で水草減少の影響か、11月～12月に南湖周辺でアカムシユスリカが多く発生しました。また、夏にはアオコが見られる場所や時期もありました。

魚介類については、前半はアユの個体数は多い一方でサイズが小さく、刺網等で獲りづらい時期がありました。8月に湖北で発生した豪雨の影響により、アユの主要産卵場である姉川・高時川の濁水が長期化し、アユ全体の産卵数は平年の75%となりました。12月のヒウオ（アユの稚魚）は比較的大ぶりでしたが、1月に入ると小さな個体が多くなり、その後の漁獲にも影響しています。ビワマスはここ数年資源量が高水準にあり、秋の遡上も比較的多く確認されました。

水質については、全窒素濃度の低い状態が続き、令和4年度は北湖で環境基準（0.2mg/L）を達成しました。この要因として、4月頃に例年と比較し多かった植物プランクトンが硝酸態窒素を消費した影響などが考えられます。春に赤潮の原因となるウログレナの増加が見られましたが、北湖・南湖ともに植物プランクトンの目立った増殖はありませんでした。

令和4年度冬は全層循環が確認され、4年ぶりに底層の溶存酸素が10mg/Lまで回復しましたが、ヨコエビやビワオオウズムシといった底生生物は依然少ない状態が続いています。11月には強風がなかった影響もあり、貧酸素の目安である2mg/Lを下回りました。1月は全体的に寒波や大雪となり、2022年度も全層循環をしましたが、その直前には湖岸部からの低温水の潜り込みにより湖底で水温が低く溶存酸素が高くなるという珍しい現象が観測されました。



南湖で増加したイバラモ（7月）



高時川の濁水（8月）



河川を遡上するビワマス（11月）



大量発生したユスリカ（11月）